

# 日常にコミュニティ・スクールの視点を 給田小らしさの再発見

世田谷区立給田小学校

## 学校運営委員会通信

平成23年度 第4号  
平成23年10月11日  
世田谷区立給田小学校  
学校運営委員会  
委員長 井上健

9月15日、校長室にて第5回学校運営委員会が行われました。

今回は、前委員で「学校運営委員会通信」の編集を引き続き担当している清水啓斗さんと、教育実習中の東京都中央大学の学生さん5名がオブザーバーとして同席しました。

最初に土橋校長より、学校の近況と職員会議の報告がされ、教員から「中庭を学級園として教育活動に活用したい」との要望が出ていたことについて説明がありました。この件については、校地や施設の利用に関わる問題もあるため、来年に実施される30周年記念式典が終わってから、みんなの手で創る方向で検討することになりました。

次に委員より、サマースクールや図書室開放など夏休み中の活動について報告がありました。

「今年のサマースクールでは、給田小出身の上祖師台の生徒が理科、数学、ボラティオとして講座に参加し、子どもたちのサポートしてくれました。母校でのボランティア活動を終えた中学生は自信をつけ、小学生はそんな先輩たちにあがれを持つたようでした。また、『ロボロボチャシューマン』作りには、北沢先生、南先生、給食調理の方も講師として参加してくださいました。普段は

なかなか話す機会がない先生方を身近に感じ、とても良い時間となりました。

図書室開放では、延べ476人の利用があり、中には卒業生の姿も見られました。今年度は、地域の方を含み、40名がボランティアとして活動し、図書の渋谷先生も毎日のようにお手伝いに来てくださいました。

続いて、「世田谷9年教育」の取り組みとして、鳥山学舎・温知学舎それぞれの合同研修会の報告がありました。研修会、提案された「学舎の一体感を醸成するために、あいさつ週間」には、児童と一緒に中学生も小学校の校門に立つてあいさつをしたらどうだろうかというアイデアが実施中であり、1週間、実現しました。全5日間のうちの3日、鳥山中の生徒さんが給田小に来てくれます。また、合同研修会では中学の先生が小学校のことをそれぞれよく知らないということがわかり、連携の必要性が強く感じられました。

最後に委員長から今後の「学校運営委員会通信」の編集・発行に関連して「普段のできごとや活動を文章にする」ことで、自分の考えが深まり、「コミュニティ・スクールとしての活動がみえてきます。また、後継者となる人たちのために、記録を残しておくことも委員の大仕事です。いい文章を乞い負わず、まず書くことから始めてください」とお話がありました。

### 議題

1. 学校長より
  - ・職員会議の報告
  - ・学級園について
2. 委員より
  - ・サマースクール、図書室開放の報告
3. その他
  - ・鳥山学舎、温知学舎合同研修会の報告
4. 委員長より
  - ・「学校運営委員会通信」について

### 出席者

- 井上 若林 多田 程原  
田中 渡邊 鈴木 土橋  
片山 鶴岡 安部  
前運営委員(通信編集担当)  
清水さん  
教育実習生  
米倉さん 佐藤さん  
正原さん 横山さん  
金子さん

### 普段の活動を「コミュニティ・スクール(CS)」の文脈で価値つける

Q 今年の課題として「普段の活動をCSの文脈で価値つけていきたいと思います」と言われていますが、難しく感じます。具体的にどのようなことなんでしょうか？

A 夏休みに、ある小学校(CS)で見たピオトープのことを例にあげましょう。案内してくれた先生の話では、活用されなくなっていた花壇の雑草を子どもたちが抜き、おやじの会のメンバーがビニールシートをかぶせ、水を入れて、完成させたそうです。ピオトープに使うための石や小魚は多摩川に出かけて探してきたという、なかなかの力作でした(きつと今頃は、美しく育った水草の上をトンボが舞っていることでしょう)。

「身近に自然を感じられる場所がほしい」「荒れている花壇をなんとかしたい」「子どもと一緒によい活動することが楽しい」「きつとピオトープがほしい」……直接たずねたわけではないので、お父さんたちがどんな思いで活動していたのかはわかりませんが、そうした活動を通じて、学校に関わる大人が増え、子どもたちの学びが豊かになるならば、汗を流した甲斐があるというものです。

そのためには、ピオトープをピオトープとしてだけみるのではなく、他の活動に繋げていくことが必要です。

上の例でも、お父さんにしてみれば、例えば、「童心に返って泥まみれになることが楽しかったのかも知れませんが、ピオトープをCSという視野から捉え直すことで「楽しかった」を超えて、何かに気づくはず。別の言い方をすれば、私たちがCSのセンスを磨いていかなければ、どんなにたくさん活動しても、本当のCSにはならないのではないのでしょうか。



らしい活動であるかどうか」という視点で見直し、センスを身につけるということですね。少しわかってきましたか？

A そうですね。給田小では、これまででもすぐれた活動をたくさんしてきています。見方を変えれば、すでにたくさんCSのピオトープがあることに気づくはずですよ。

Q とすると、夏休みに行われた学校運営委員と教職員との「フリー・トークの会」には多くの先生が参加され、有意義な会となったようですが、昨年と比べて先生がたのCSに対する意識はいかがですか？

A 今号の2頁に「先生方の感想」が出ていますが、それを読むと、CS活動が始まった頃とは質的に異なる見方が示されていることがわかります。以前は、CSを地域の行事やボランティアの活動などに結びつける見方がほとんどでしたが、ここには「学校外での子ども姿を見て、その後の教育にひらめきが生まれた」とか、「保護者の姿にCSらしさを感じた」といった声が上がっています。これは、先生方が「給田小らしいCS」を感じつつあるからではないでしょうか。ぜひ、CSだからCSをやらなくては

いけないのではなく、普段の活動のなかにCSの精神が息づいていることが重要です。

ただそうは言っても、これまでと同じことをしながら、視点や意識を変えていくのは難しいことです。そうした意味でも、先生方が、スポーツテストや総合的な学習の時間に保護者や地域住民を巻き込んだ新しい試みを行っていることに注目しています。

### Q 普段の活動をCS

夏休みも終わりに近づいた8月24日昼、滋賀県長浜市立びわ北小学校・北郷里小学校の学校運営協議会推進委員の方8名（各校4名）、および新宿区教育委員会の方3名が視察のため本校を訪れました。

また同日午後3時から4時半まで、教職員と学校運営委員との「フリー・トークキングの会」が開かれました。2度目となる今回は夏休み中にもかかわらず26名の先生が参加されました。

## びわ北小・北郷里小からの視察を受けて

### 視察を受けて



新宿区教育委員会のみなさん  
びわ北小・北郷里小のみなさん

夏休みも終わりに近づいた8月24日昼、滋賀県長浜市立びわ北小学校・北郷里小学校の学校運営協議会推進委員の方8名（各校4名）、および新宿区教育委員会の方3名が視察のため本校を訪れました。

また同日午後3時から4時半まで、教職員と学校運営委員との「フリー・トークキングの会」が開かれました。2度目となる今回は夏休み中にもかかわらず26名の先生が参加されました。

その後、委員長から給田小のCS指定以来4年の経緯、そして5年目の実践や今後の課題などの話があり、意見交換を行いました。話題は多岐にわたりましたが、その中で、学校運営協議会（給田小は学校運営委員会）の構成メンバーについて出席者の関心が集まりました。長浜市の学校運営協議会の委員の主体は、リタイヤされた地域の方や比較的高齢の方がたに多い見込みとのこと。一方給田小は、そうした地域の方がたは既に学校を支える多くの組織で活躍されていることもあり、学校運営委員会の主な担い手は、在校生

や卒業生の親など、学校との関わりがある現役世代です。それぞれに良さも問題点もありお互い学び合うところがありますね、という話をした後、委員長から「CSとは、子どもたち一人ひとりを、学校と家庭と地域とがバラバラにではなく、みんなで育てていく取り組みです。ただ、その方法は一つではなく、地域の実情に応じて異なるでしょうから、そこをしっかりと考えなければいけません。給田小も随分迷い、考えながらやってきました。自分たちの向かすべき方向をよく考えて、それを天切にしたがってメンバーを選び、学校にマッチした組織を作っていくにはいいのではないのでしょうか。」とのアドバイスがありました。

他方、新宿区は昨年度に中学校1校、今年度1小学校3校がCSとしてスタートを切ったばかりのことですが、教育委員会の方は「世田谷区は新宿区と似たような環境にあるので、色々参考になるお話を聞けてよかった」との感想を述べられていました。

最後に、「CSの活動をしてきて、一番強く感じていることは？」との問いに、「子どもの成長には様々な大人との関わりが必要だと思うのでCSの指定を受けましたが、子どもだけでなく教師もいい方向に変わってきているように感じます。」（校長）、「CSは日本の公教育を大きく変える可能性がある。そのような期待と願いを胸に活動しています。」（委員長）との熱い思いが語られ、視察に来られた方がただでなく給田小の委員にとっても、がんばっていかうという気持ちを新たにしたい有意義な会となりました。

## 教職員と運営委員との「フリー・トークキングの会」

### 「フリー・トークキングの会」開催

「フリー・トークキングの会」開催とあたり井上委員長より、「CSに指定されて5年目となる今年度は、新しい視点でCSを考えていくことも、委員会と保護者（P・A）、教職員との連携を深め、CSとしての活動をしっかりと根付かせることを目指します。具体的には、CSだから特別な活動をしなければいけないという考えではなく、給田小がしてきたこと・していることをCSとして視点で見直すことにより、給田小らしさを再発見し、よりよい教育活動へのアイディアをたくさん見つけてほしい。保護者や地域の方が学校と関わることで、大人と大人、大人と子どもとの関係が深まり、『私たちの学校』と愛着と誇りを持つような学校であれば、それがCSといえるのではないか」という話がありました。



出席者 運営委員9名  
教職員26名（校長先生、副校長を含む）

次に、学年・専科ごとに、先生方がどのような時に「CSらしさ」を感じるかを発表していただきました。「地域でのピアノやダンスなどの発表会やサッカー・野球などの試合に足を運び、学校以外の場ががんばる子ども姿を見ることが、その後の教育にひらめきが生まれた」「教員、地域住民と分けることなく、植物を一緒に育てるなど、子どもたちのためにみんなで何かをやっていることがCSらしいと思った」「わが子だけでなく、子どもを注意してくれる保護者がたくさんいる。そうした姿にCSが根付いてきたと

感じる」「保護者や地域住民のボランティアの受け入れを躊躇する学校もある。給田小の場合、子どもの成長を共に見守り、喜び合える雰囲気や保護者や地域住民にあるので、ボランティアが自然に受け入れられているのではないか」

「このような先生方の発言を受け、委員からは「給田小が子どもたちのふるさとになっていく」「子どもが多くなる大人と触れ合うことが大事と感じた」「まずは挨拶から始めて知っている人を増やしていきたい」「CSを意識して活動することで、もの見方が変わってきた」などの感想が述べられました。

最後に委員長から「ボランティアが協力してくれてありがたい」とか『いい授業ができ良かった』で終わらせてしまつては、広く、普段の活動をCSの文脈に位置づけ、広い視野から考えることが新たな発見をもたらす、教師としての力をさらに高めてくれるはず」と先生方への激励がありました。

先生方にも委員にとっても、このフリー・トークキングは、CSとしての給田小を見つめ直す良い機会となりました。和やかな雰囲気の中、給田小へのみんなの思いがあらわにあつたという間の1時間半でした。

**給田六所神社  
例大祭**

**10月22日(土) 宵宮**  
 演芸 神社境内の神楽殿で6時～  
 給田小の子どもたちも空手やダンスで出演します。

**10月23日(日)**  
 午後1時から山車が出ます。  
 どなたでも参加できますので、六所神社においでください。

# 「総合的な学習の時間」の取り組み

## 3年生

### 地域安全マップ作り



見かけで判断してはいけません!

「不審者の出没、児童の連れ去りなど、子どもたちが巻き込まれる事件が社会問題となっています。給田小学校では、子どもたちの安全への意識を高める指導を行っています。その一環として、今年度から3年生が「総合的な学習」の授業で「地域安全マップ作り」に取り組んでいます。

また真夏のようか暑さが残る6月15日、子どもたちはボランティアの保護者と一緒、校外学習を行いました。事前、「写真やDVDを見ながら考えた「危険な場所」(半ワード)は「不審者が入りやすく、見とくにくい」に加えて、「ミ」がたたくと落ちてくることや落書きがあるところなどを自分の目で確認しながら歩きまわした。子どもたちは、慣れ親しんだ通学路やよく遊んでいる公園にも危険がたくさん潜んでいることに気づき、びっくりした様子でした。

今回は、ボランティアの保護者にも、事前の説明会が開かれました。3年学年主任の中澤先生から「この授業を通して、自分たちが住む地域だけでなく、どこかに出かけたときにも、そのような意識を持って危険から身を守るための目を持って欲しい」とお話があり、ボランティアの方からも、普段の大人の高度ではなく、子どもとの目線と一緒に校外学習を取り組むことができました。ボランティアに参加したある保護者は「不審者等の出没もなく、安全な場所だと思っていたが、こうして子どもと一緒に同じ目線が歩いたり、話をすることが重要と感じました」と話していました。

地域のみなさまには、子どもたちのインタビュー笑顔で協力いただき、ありがとうございました。



人目が無く、意外と危険な歩道橋

## 6年生

### 続・地域ボランティアに取り組もう

前号ではスペースの関係で掲載できなかった6年生の「地域ボランティアに取り組もう」を紹介しています。今回紹介するのは「老人ホーム訪問グループ」です。

### 老人ホーム訪問

「老人ホーム訪問」グループは、フォーライフ桃郷・セタがや給田乃杜・デイサービスセンター悠ゆう・千歳敬心苑の4つを訪問しました。歌や演奏、折り紙、読み聞かせなどで交流することで、お年寄りの笑顔を見て自分たちも嬉しい気持ちになり、元気をいただけたことに感謝の気持ちをもっていたことは大いにありがたかったです。



私は、おじいさんやおばあさんを喜ばせるのがボランティアだと思って老人ホームに行きました。逆に私たちが楽しませてもらうと思います。みなさんの名前を覚えて、仲良くなることもできました。心の中に嬉しさが残りました。

(児童の感想)

児童にとってはよい勉強・体験になったと思いますが、高齢者(利用者)のみなさんにはどんなふうに感じているのでしょうか。そこで、学校運営委員会がこつした活動に対する施設側の意見や感想をつかってみました。

### フォーライフ桃郷さんの感想

「ご利用者も、6年生のみなさんと同じように目を輝かせ喜んでいらっしゃいました。ありがとうございました。」

### セタがや給田乃杜さんの感想

給田体操を皆さんで行い、とても楽しかったです。また、給田小学校の方と体操をしたいですね！

### 千歳敬心苑さんの感想



6年生は高学年ということもあって、とてもスムーズに交流ができました。みなさんが親切に教えてくださった折り紙は、お年寄りが昔を思い出しながら主体的に楽しむことができてよかったです。機会があったらまた来て下さい。

### デイサービスセンター悠ゆうさんの感想

先日は、盛りだくさんのプログラムを準備して来てくださってありがとうございました。私たちがデイサービスを利用する方がたが日中楽しく過ごせるように口替わりでいろいろなプログラムを用意しています。みなさんのような小学生のほかに保育園児と中学生と高校生が定期的に施設を訪れてくれていますが、お年寄りは、保育園児のことは微笑ましく見つめ、中学生には質問攻め、高校生にはちょっと緊張することもありますが、そして、小学生からは元気をもらっています。

今回、小学生が自分たちのために色々なことを一生懸命準備してやってくれたことがとても嬉しかったです。ですが、何も準備していません。ただそばに来てくれて傍で読書しているだけでも嬉しかったです。一人暮らしの方も多いため、特別なことをしなくてもさやかな日常の人のとの触れ合いがありがたいのです。若い人が正気に活動していることが自分だけで元気が出る。表現は難しいとは思いますが、家庭での体育の授業を見学できたお年寄りが正気にならなうううと考えることもあります。

小学生のみなさんもおよぶような交流を通して、高齢者のことを今までより理解できるきっかけ、例えば道を声を掛けても反応がない時、あつ耳が遠いのかな・・・と想像をめぐらせることができるようになったらいいなと思います。

チャンスができましたら、急でも構いませんので、また是非遊びに来て下さい。

# 給田囃子連



きゅうてんはなれん  
 秋、五穀豊穡に感謝してあちこちでお祭りが行われる季節となりました。まちを歩いていくと、どこからか、祭りの囃子が聞こえてきて、心がきりきりしてきます。



これは、この春に活動を始めた「給田囃子連」のみなさんの演奏。  
 連を結成した理由は、給田には大人のお囃子がなく、自分たちでお囃子を演奏したいという思いからだとです。9月末、六所神社をたずねて、練習の様子などについてお話をうかがいました。



毎週金曜日午後7時から始まる練習は、下は4歳から上は74歳までという世代を越えた仲間が、学校や仕事を終えて集まってきました。指導するのは、給田小いもはやしの指導者でもある伊藤弘康先生と卒業生の高校2年生3人（鈴木絢裕君・田中夏彩さん・西谷沙優輝さん）です。メンバーはおよそ20名で（前田の）高校生3名を除く全員が初心者。

広間には御座が敷かれ、大小7台の大鼓が整然と並び、そこに鐘や笛が加わって、和やかな雰囲気の中にも真剣な練習が始まりました。



田中夏彩さんによる獅子舞

譜面には見慣れない記号とふしが並び、余白にはびっしりと書き込みがありましたが、音はCDを聞いて覚えられているように思えます。伊藤先生は「大鼓は『間』が大切で、たいてい身体で覚えるしかない」と言います。発

起人の一人でもある田中龍次さんは50歳近くになってから笛の魅力に惹かれ、「この年になっても新しい事をほじめられるのは素晴らしい」とうれしそうに話していました。  
 普段は親や先生との会話も避けがちな年代の高校生も「ここは特別」とのこと。この日、塾に行く前の1時間練習に参加していた鈴木絢裕君は「給田小いもはやしには卒業後も時々お手伝いに行っていました。定期的に活動するのは久しぶりです。大人と一緒に活動をするのもはじめて戸惑いましたがみなさんがはまっているし、上達も早いので楽しいです」と話し、部活を終えて駆けつけた田中夏彩さんは「今日はブルでぐったり」と言いながらも、獅子をかぶった途端に、まるで獅子が生き返ったように動きます。踊り終え、汗を拭きながら「ここにいる時のお父さん（田中龍次さん）は、いつもと違ってスゴイ（笑）。尊敬します」と言っています。



親子で共演！ 田中龍次さん・夏彩さん

今年はお囃子に踊りも加わり、富岡豊凧ちゃん（7歳）と花蓮ちゃん（4歳）の姉妹がお稽古をしています。踊りの指導をしていた高橋茂さんは、お孫さんを見るような温かなまなざしで、時折おどけて笑わせながらも挨拶などは厳しく教えていました。

今回、「給田囃子連」のみなさんのお話をうかがって、地域に世代を越えた仲間が集まり本気で楽しそうに練習していることをうらやましく思いました。その背景には、この地で30年以上も活動してきた「給田小いもはやし」の存在も忘れてはなりません。「しっかり練習して、今後は給田小いもはやしの卒業生や地域のみなさん、さらに烏山小学校の子どもたちにも声をかけて仲間を増やしていきたい」と前田の田中龍次さんは夢を語ってくれました。  
 こうして地域の文化が受け継がれていくことに給田地域の強い繋がりを感銘しました。みなさんも、例大祭でのお囃子をぜひ聞きに来てください。

## 今月のわんこ 新部マロンくん

ミニチュアプードル（トイプードルとして飼い始めましたが、先日観たテレビで、マロンの体重だとミニチュアプードルになると知りました。）  
 1歳5ヶ月（4月27日生） 男の子



性格は、人懐っこい、警戒心がなくおだやか。マロンの名付け親は、給田小の6年生の女の子たちです。  
 毎朝、給田小の校門で「おはよう」のあいさつを続けているうちにみなさんと仲良くなり、今では自分をすっかり人間だと思っているようです。  
 朝、お友達と会うのをとても楽しみにしているマロンです。これからも元気にあいさつしてくださいね！

## あとがき

学校運営委員となって半年あまり、地域とのつながり、学校とのつながりについて考える機会が増えました。自分の生まれ育った地域や学校を思い出すとき、風景や建物とともにそこにいた人たちの顔が思い浮かびます。

この給田という地域で生まれ育ったわけでもない私が、これからも生活するこの地域とのつながりを考えた時に無意識に求めたのが人とのつながりでした。子ども達の両親とお付き合いすることから始まり、子どもが入学すると、PTA活動に参加し、PTAバレー部に加入し、たくさんのお母さん方と知り合うことができました。また、子どもが少年野球を始めてチームを手伝ううちに、たくさんのお父さん仲間もできました。さらにPTA会長をやさしくになり、学校や地域行事に顔を出すようになったことで、たくさんの子どものたちや保護者でない地域の方が声をかけてくださるようになりました。

とても嬉しく感じていますし、「ここで生活していることが豊かになった感じがしています。思うと、すべて子どもがいてくれたからこそであり、子どもと産んでくれた妻に感謝しています。

これから大人となり社会に出ていく子どもたちにとっても、今、多くの人とつながりを持つことが、子どもを人として成長させ、地域を思ふ心を養う大きな糧になっていくのだと思っています。少しでもそのお手伝いができると、努力していきます。

学校運営委員  
 芝崎 剛

